

Title	前置要素と語彙位格構造
Author(s)	東條, 良次
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1988, 22, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50003
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

前置要素と語彙位格構造

東 條 良 次

1. はじめに

本論は、Prince (1981) の議論を発展させた東條 (1987) に基づきつつ、情報構造の観点から英語における語順、わけても文要素の前置にかかわる問題を考察し、前置要素の有する機能について形式化を試みる。さらにそこから進んで、上記二文献において論じられてきた指示的旧情報に加えて、語彙的旧情報とでも称すべき概念が前置要素にかかわる直観を説明するために必要であることを示す。

2. 情報価付与と情報構造

情報構造とは、ある言語表現によって指示される対象が、先行文脈や発話の脈絡との関連において、聴者の心の中でどのような心理的地位を占めているかについての、話者の想定に基づいて決定される構造のことであるが、従来は極めて漠然とした形でのみ考えられていた概念であった。東條 (1987) は Prince (1981) が示した名詞句の情報構造上の地位に関する分類を発展させ、次に示す情報価付与規則を公式化した。

- (1)問題の名詞句によって言及されている実体にあてはまる条件を選び、それに対応する情報価をその名詞句に付与せよ。
 - a. 「実体は聴者に知られていない」と話者が想定している。→BN
 - b. 「実体は聴者に、知られてはいるが意識されてはいない」と話者が

想定している。→U

c. 「実体は、既に聴者に意識されている実体あるいは他の推定可能な実体から推定され得る」と話者が想定している。→I

d. 「実体は聴者に意識されている」と話者が想定している。→E

(2)問題の文によって言及されている事象にあてはまる条件を選び、それに対応する情報価をその文に付与せよ。

a. 「事象は聴者に知られていない」と話者が想定している。→BN
(以下略)

BN, U, I, Eの記号はそれぞれ brand-new (最新), unused (未使用), inferrable (推定可能), evoked (想起)の略号で情報価を表すが、これらの値の間には次のような関係が成り立つ。

(3)情報価尺度

$BN > U > I > E$

(例えば $BN > U$ は「BNはUより新しい」と読む。)

(3)により、情報価が付与された任意の二つの要素の新旧を比べることが可能になる。

さて、(1)、(2)の規則により、(4)の a, b には(5)に示すように情報価が付与される。

(4) a. John bought toys for his sons, Jim, Tom and Harry, and he seems to have given a toy car to Tom.

b. No, he gave it to Harry.

(5) a. John bought toys for his sons, Jim, Tom and Harry, and
E 1 (U) E 2 (BN) E 3 (U)

I 1 (BN)

he seems to have given a toy car to Tom.
E 4 (E) E 5 (I) E 6 (E)

I 2 (BN)

b. No, he gave it to Harry.
 E7(E) E8(E)E9(E)

I3(E)

(括弧内の記号は情報価、括弧の前のEならびにIはそれぞれ実体表現 (entity expression)、事象表現 (incident expression) を示す略号で、これらはおのおの名詞句ならびに文に相当する。)

さらに、(4 b) の Harry が、最も古い情報価Eを有するにもかかわらず、ある種の直観によれば新情報と見なされている事実を説明するため、(6)の修正要素指定規則を提案するが、これによって(5 b)は情報価付与に加えて修正要素指定を受け、(7)となる。

(6)ある文を別の文に修正している要素を後者の文の修正要素として指定せよ。

(7) No, he gave it to Harry.
 E7(E) E8(E)E9(E)

I3(E)

M

(7)におけるMは修正要素 (modifying element) を示すが、修正要素とは(5)のI2をI3に修正している要素ということであり、(7)の修正要素が何ら指の意味で「新しい」と直観されるのは、この要素が、I2とI3が共通してか示している事象に対し、不適切な要素 Tom に代えて新しく付け加えられた要素だからである。

これ以後、我々は、情報価により表示される構造を狭義における情報構造あるいは狭情報構造と呼び、これに修正関係を加えたものを広義における情報構造あるいは広情報構造と呼んで、両者を明確に区別することにする。

3. 語順と情報構造

本節では前節での議論を踏まえながら語順と情報構造との関係について考えてみる。¹⁾ 一般に、より古い情報を担う要素がより新しい情報を担う要素に先行する場合、その文は無標の情報構造を持つといい、逆に、より新しい情報を担う要素がより古い情報を担う要素に先行する場合、その文は有標の情報構造を持つというが、この関係を図式化すれば(8)のようになる。

$$(8) \left[\dots \left[\frac{NP_1}{E_1(X)} \right] \dots \left[\frac{NP_2}{E_2(Y)} \right] \dots s \right]$$

(情報価尺度において $X > Y$ ならこの文の情報構造は有標、 $X < Y$ なら無標)

ある要素がより古い情報を担っているということは、その要素がそれだけ聴者にとって心理的に接近しやすいということであり、話者が旧情報を担う要素を新情報を担う要素に先行させれば、聴者は理解のための負担の小さいものから入っていけることになる。また、新情報を理解するに際しても、聴者は旧情報を用いることによって、新しい情報を、先行する文脈あるいは周囲の状況と関連させつつより適確に理解することができるのである。

ところで、英語に限らず、恐らくはあらゆる自然言語において、同一の認知的意味を有しているにもかかわらず、互いに名詞句の表層上の位置が入れ代わっているような構文の対が存在している。認知的意味を変えることなく名詞の線的な位置を交換できるという意味でこれらを交換対と呼ぶならば、これら交換対は互換的に用いることが可能なため、有標の情報構造を無標のそれにするための手段として用いることができる。

$$(9) a. \frac{\text{Bill}}{E} \text{ gave } \frac{\text{this book}}{U} \text{ to me.}$$

- b. This book, Bill gave to me.
E U
- (10) a. Journalists immediately surrounded her.
BN E
- b. She was immediately surrounded by journalists.
E BN
- (11) a. Fred lent a hammer to him.
U E
- b. He borrowed a hammer from Fred.
E U

(9), (10), (11)のそれぞれにおいて a と b は交換対をなし、認知的な意味は同じであるにもかかわらず、名詞句の線的な順序が入れ代わっている。そこで、話者は、a の諸文において有標の情報構造で表現されていることを b の諸文を用いれば無標の情報構造で表現することができるわけである。²⁾

では次に、これら交換対にどのような型が存在するか考えてみよう。第一の型は名詞句の線的な位置のみを変えて、文法関係と動詞部分の語彙的な選択とは変えないものである。例えば(9)の対では、b の文で *this book* が前置されていわゆる話題文化になっているため、a と b とでは名詞句の相対的な位置が入れ代わっている。が、*Bill* が主語で *this book* が目的語であるという文法関係は a, b 共に同じであるし、動詞も語彙的に同一の *give* が用いられている。第二の型は、名詞句の相対的な位置に加えて主語・目的語の文法関係も入れ代わっているもので、(10)を例に取れば、この対では、名詞の相対的な位置が交替しているだけでなく、a の主語である *journalists* が b においては非主語となり、逆に a の非主語の *her* は b では主語になっている。ただし、この場合も、一方で *surrounded* と能動態が用いられ、他方では *was surrounded* と受動態が用いられているという違いを除けば、*surround* という動詞の選択は同じである。これに対して第三番目の型は、(11)に見えるように語順・文法関係・動詞の語彙的選択の

すべての点において相互に異なっている。以上の考察から交換対は三つの類に分類できることになるが、これら三つの類に共通な語順の変更以外の二つの変更要素を、文法関係が変更されている $=+\alpha$ 、動詞の語彙的選択が変更されている $=+\beta$ とし、変更されていない場合を $-$ で示すなら、交換対の三つの類は(12)のように表せる。

(12) I類 $[-\alpha, -\beta]$

II類 $[+\alpha, -\beta]$

III類 $[+\alpha, +\beta]$

第I類・第II類の交換対は $[-\beta]$ なので対をなす構文どうしは統語的に関係づけられて、ある程度明確に有標無標の関係が成り立つけれども、第III類の交換対の場合は対をなす構文同士のつながりが前二者ほど明白でなく、一方が他方より派生的であるという意味での有標無標の関係にはないといえる。

4. 情報構造と前置要素の解釈

続いて、前節で交換対の第I類に属する構文として位置付けられた前置構文について考察する。情報価の点から見ると、前置された名詞句は(9 b)では情報価Eを付与されていたが、このため、(9 b)の情報構造は無標になっていた。このように無標の情報構造をもたらす名詞句前置は、先に見たとおり、先行文脈との結び付きの強い要素を先に示すことで、聞き手に、後に来る新情報を解釈するに当たって、それが先行文脈とどのように結び付いているかを考慮させ、文意をより円滑に理解させるという効果を持つ。

しかしながら、前置は旧情報を担った要素に対してのみ適用されるものではなくて、新情報を担った名詞句や、ここで前提とされている枠組では情報価を付与されないと考えられている副詞や形容詞、動詞などに適用さ

れることもある。

- (13) “What do you like to eat?” “Fried eels I like to eat.” (福地 (1985, p.77))
- (14) It was expensive, but seldom has John been so pleased. (Emonds (1976, p.29))
- (15) I went to see the new James Bond film yesterday, and very exciting it was, too. (Radford (1988, p.70))
- (16) Give in to blackmail, I never will! (*Loc. cit.*)

そこで、まず、新情報を担う名詞句の場合について考えてみよう。旧情報を担っている名詞句の場合と違って、新情報を担う名詞句はもともと理解のための負担が大きいのに、これがさらに前置されている場合、聴者は解釈の手がかりとして旧情報に頼れないことになり、さらに負担が大きくなって、そこから強調の効果が出来ることになる。

ところで、名詞句に関する上のような説明は、情報価が付与されるのが名詞句と文だけだとの想定の下では、(14)~(16)の情報価を付与されない副詞などの前置要素に対して、これらが前置された名詞句と同じように強調の効果を有するにもかかわらず、適用できない。もし、これらの要素が示す強調の効果を情報価によって説明しようとするならば、文頭に前置された要素に対しては例外的な情報価付与がなされるとでも考えねばならない。その場合には、(14)~(16)の前置要素に対してもBNの値が付与されて、一応情報価によりその強調の効果が説明されることになる。

が、このような例外的情報価付与にはいくつかの問題点がある。まず理論的には極めて場当たりのものであるとの印象を否定できない。文と名詞句以外の範疇に対する例外的な情報価付与は、文頭という位置に厳密に限定されているとはいえ、情報価理論のもつ一般性を弱める結果になるのは明らかである。さらに、形容詞や副詞には指示対象がないとすると、指

示対象の心理的地位に基づいて付与されるはずの情報価がどうしてこれらの要素に付与されるのであろうか。また、経験的にも(17)のような例は問題である。

(17) Wes *nævre* gæt mare wreccehed on and, ne *nævre* hethen men werse ne diden þan hi diden. (Mossé (1952, p.135))³⁾

(Never was yet more misery on land and never did the Danes do worse than they did.)

(17)の第二文における *nævre* (=never) の前置は、普通第一文におけるそれと同じく強調のための前置と考えられている。が、もし例外的情報価付与によりこの要素に対して情報価が付与されるならば、第一文において *nævre* が既出であることから第二文の *nævre* はEの値を持つとせねばならないのであって、その結果、情報価の観点からは第二文の *nævre* が強調されているという事実を説明できないことになる。これらの理由から、我々は文頭における例外的情報価付与は認め難いと結論せざるをえない。

そこで前置要素に対して「構造的に強調されている」という概念を適用してみよう。受動態の主語などと異なり、前置された要素は通常の文の領域から抜き出されており、構造的に極めて卓立した位置にあるといえる。そこで、情報価をもたない前置要素が有する強調的効果はこの抜き出された構造に由来していると考え、このような強調を情報価に基づいた情動的強調から区別して構造的強調と呼ぶことにしたい。ここで注意せねばならないのは、情報価をもつ前置要素も同様の構造をもっていることで、そのため新情報を担う名詞句は構造的にも情動的にもいわば二重に強調されていることになり、また、旧情報を担う名詞句は情動的には円滑な理解のために前置されているながら、構造的には強調されていることになる。この関係を図示したのが次の(18)である。

(18)

		情動的側面	構造的側面
名詞句	新情報	情動的強調	構造的強調
	旧情報	円滑な理解	構造的強調
非付与範疇			構造的強調

構造的側面においてはすべての前置要素が強調されているが、他方、情動的側面においては情報価の有無やその新旧により前置要素の機能は異なっていることになる。

5. 語彙位格構造

前節における考察の結果、我々は前置された非付与範疇は情報価を持たないとの結論に達した。しかしながら、(14)~(16)における情報価を持たないはずの前置要素も直観的には新情報のようにも感じられるのであって、先にこれらの要素に例外的情報価付与を行うことを考えたのもこのためであった。本節ではこの直観を明示的に説明することを試みる。

まず、始めに、文が有するBNの値によって説明することを考えてみよう。第二節において見たとおり、修正要素を除いた文の残りの部分が旧情報であるという直観は、文全体の情報価Eに由来しているわけだから、情報価を持たない前置要素も同様に説明できる可能性はあるわけである。ところが、これには(17)の例がまたもや問題になる。

(18) Wes nævre gæt mare wrecched on land,
BN

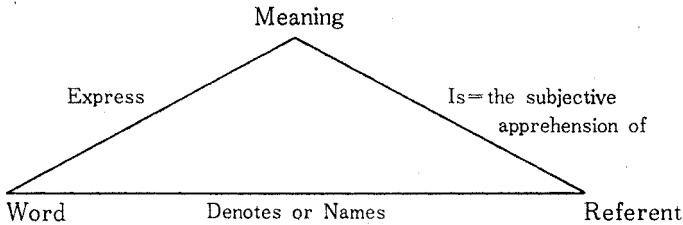
ne nævre hethen men werse ne diden þan hi diden. (=17)
BN

第二の *nævre* は直観的にはある種の旧情報を担っているけれども、この要素を含む文の情報価はBNであってEではないから、第二の *nævre* が旧情報であることを文全体の情報価によって説明することはできないこと

になる。

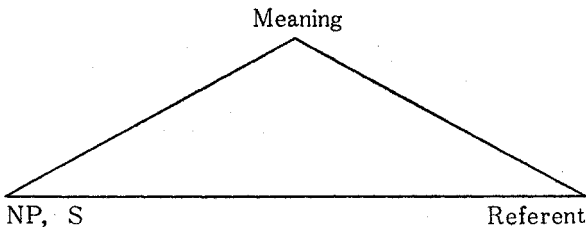
そこで、第二節で論じた、ある表現の指示対象の心理上の地位に基づいて決定される新情報・旧情報の区別とは別に、記号としての語それ自体が聴者の心の中で有する心理的地位に基づいて決定される、やはり新情報・旧情報と呼んでも差し支えないようなある種の区別が存在すると考えてみよう。すると、(17)の第二の *navre* が旧情報だと感じられるのはこの語の指示対象が聴者に意識されているからではなくて（実際、*navre* の指示対象などというものは存在しないのだから）、この語自体が聴者に意識されているからであるということになる。この関係を理解するにはいわゆる意味の三角形が役立つかもしれない。

(18)

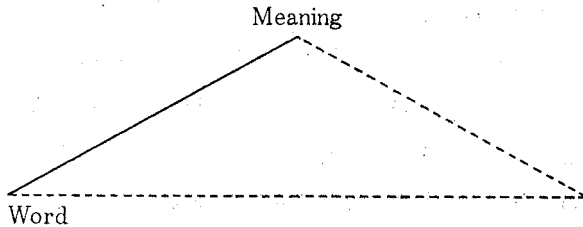


上の三角形は Stern (1931) に示されたものであるが、我々の枠組では多少の修正を要する。

(19)



(20)



(19)は指示対象に関する新旧情報と関連するが、指示対象を有するのは名詞句と文である。他方、(20)のほうは本節で新たに導入した、語に関する新旧情報にかかわるもので、語には一般に指示対象がないと考える。前者を指示的旧情報 (referential givenness または R-givenness)、後者を語彙的旧情報 (lexical givenness または L-givenness) と呼ぶことにしよう。さらに、情報価に相当する、語彙的旧情報における概念、言い換えれば、先行文脈との関連において、記号としての語が有する心理的地位を語彙位格 (lexical status) と呼ぶなら、この語彙位格は語彙位格付与規則 (lexical status assignment rule) により個々の語に付与され、情報価が狭情報構造を形成するように、語彙位格構造 (lexical status structure) を形成することになる。

ところで、我々は先に指示的旧情報における情報価として BN, U, I, E を想定したが、語彙位格についてはどのような値を想定すればよいであろうか。言語の指示対象が問題なら、BN (知られていない) という値はごく普通のものであろうが、記号自身が問題になって来ると、大部分の語は U (知られてはいるが意識されてはいない) か E (意識されている) の値を持ち、BN は極めて希なものになる。なぜなら、ある語が BN の値を持つということは、聴者がその語を知らないだろうという話者の想定を意味するからで、自分の言わんとしていることを聴者に理解してもら

いたいと思っている限り、話者のほうでは、このような事態はできるだけ避けるのが当然だからである。問題なのは I (推定可能) であるが、ここでは一案として、go, went, gone, going や book, books あるいは fast, faster, fastest のように、単一の語が有する屈折形の間には推定可能という関係が成立するものと考えておく。

以上の考察を踏まえて語彙位格付与規則を公式化すると次のようになる。

(21) 問題の語にあてはまる条件を選び、それに対応する語彙位格をその語に付与せよ。

a. 「語は聴者に知られていない」と話者が想定している。→ BN
(以下略)

(21)によって、例えば(17)には(22)に示すように語彙位格が付与される。⁴⁾

(22) Wes nævre gæt mare wrecched on land, ne nævre hethen
U U U U U U U U U E U
men werse ne diden þan hi diden.
U U E U U U E

本節ではまとめとして、指示的ならびに語彙的の二種類の旧情報に関連した諸概念を対比させてみる。

(24) 指示的旧情報

語彙的旧情報

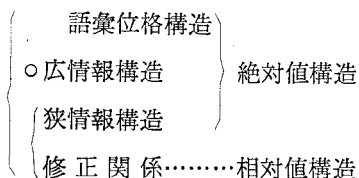
- 狭情報構造
- 付与範疇
 - 名詞句
 - 文
- 情報価
 - BN, U, I, E

- 語彙位格構造
- 付与範疇
 - 語
- 語彙位格
 - BN, U, I, E

狭情報構造と語彙位格構造における値が、付与範疇の指示対象あるいはその範疇自身の、聴者にとっての心理的地位のみに基づいて絶対的に決定さ

れるのに対し、修正関係は修正要素のみならず文全体ともにかかわってくるところから前者を絶対値構造、後者を相対値構造と呼び、これら全体を拡大情報構造と呼ぶなら、この関係は図のように示せることになるであろう。

②) 拡大情報構造



注

- 1) 語順と情報価の問題とは、言い換えればある文の内部において情報価を有する要素がどのように配列されるかの問題であるが、もし補文に対しても情報価が付与されるなら、主文内部における補文の相対的位置の問題も当然語順と情報価の問題に含まれることになる。しかしながら、目下のところ補文に対する情報価の付与についてはその可能性があるということしかわかっていないため、ここで扱うのは文の内部における名詞句の配列順序に関する問題のみということになる。
- 2) 情報構造の有標・無標を構文の有標・無標と混同してはならない。例えば(9 a)の情報構造はU>Eであるから有標であるが、構文自体は無標である。他方、(9 b)の話題化文では、情報構造は無標であるが構文自体は有標である。もちろんこれ以外にも、情報構造・構文ともに無標である場合、両者ともに有標である場合もありうる。
- 3) この例は中世英語からのものであるが、*never*の前置を連続して用いることは現代英語においても可能であり、この例における前置に関する議論は現代英語に関しても同様に有効である。ここで中世英語を例に用いたのは、偶然筆者が*never*の前置の連続して用いられている例を、この年代記の一節に見いだしたからという以外に他意はない。
- 4) 議論を単純にするため、この一節のみを問題にし先行する文脈は無視する。

参考文献

- Brown, G. and G. Yule.: *Discourse Analysis*, (Cambridge University Press), 1983.
- Emonds, J. E.: *A Transformational Approach to English Syntax*, (Academic Press), 1976.
- 福地肇: 『談話の構造』(大修館), 1985.
- Mossé, F.: *A Handbook of Middle English*, J.A. Walker, (The Johns Hopkins University Press), 1952.
- Prince, E.: "Toward a Taxonomy of Given-New Information", in P. Cole, ed., *Radical Pragmatics* (Academic Press), 1981, pp. 223-255.
- Prince, E.: "Fancy Syntax and 'Shared Knowledge'", *Journal of Pragmatics* 9, (1985), pp. 65-81.
- Radford, A.: *Transformational Grammar* (Cambridge University Press), 1988.
- Stern, G.: *Meaning and Change of Meaning* (Indiana University Press), 1931.
- 東條良次: 「情報価付与と修正関係」, *Osaka Literary Review* 第26号 (1987), pp. 1-12.

追記: 本文 pp.22-24 の *navre* において用いられている α は厳密には α の斜体字であるが、 α の斜体の活字がないため、やむなく代用したものである。したがって、 α は、全ての α 斜体字の代りとして用いられている点、御了解いただきたい。

(大学院後期課程学生)